

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて2月号)

<p>山下 悦子</p> <p>①被災者は官学業に見捨てられた (戸谷英世) —THIS IS 読売 1995・1・17の悪夢から2年。犠牲となった被災者達の教訓が生かされていない復興事業</p> <p>②対談「世界最悪の官僚支配をこうして崩す」 (佐高信、K・V・ウォルフレン) —現代 大蔵省をはじめとする官僚支配の構造批判を使命とする2人。対極の小沢一郎評価に注目</p>	<p>中西 輝政</p> <p>①特別企画 縄文 その魅力をたどる (梅原猛、森浩一、安田喜憲ほか) —THIS IS 読売 日本と日本人を見るわれわれの視線を確実に変えてゆく、浮上する縄文世界への入門特集</p> <p>②「新しい教養」へのヒント (筒井清忠) —アステイオン新年号 今日の教養と21世紀を見る視点として中国古典文化の重要性を教える</p>	<p>橋爪大三郎</p> <p>①語り口の問題——ユダヤ人問題とはわれわれにとって何か (加藤典洋) —中央公論 日本人が歴史の主体に復帰するのにユダヤ人学者アーレントの語り口と苦悩が手本になる</p> <p>②最後の氷山——中国の報道改革 (戴晴) —世界 一昨年から強化された世論指導 (中国政府のマスコミ統制) を鋭い女性記者が告発する</p>	<p>編集部</p> <p>①死生観を問わぬ「がん論争」への疑問 (西部邁) —諸君! 「闘うな」論の提起を評価しながらも、論争に「死生の倫理」の視点が欠けていることを指摘</p> <p>②没後10年・素顔の流澤龍彦 架空の庭のおにちゃん (矢川澄子、山下悦子ほか) —正論 『O嬢の物語』の下訳もした元夫人が語る、異端の文学者の1950~60年代の知られざる素顔</p>
---	---	---	--

雑誌を読む

1月

「日米中」関係

- ◆97年、米中は和解する (田中明彦) —中央公論
1989年の大激震の余震も、収まる可能性が出てきた
- ◆アジアの中の日米中関係 (小島朋之) —アステイオン新年号
「全方位」「威信」という中国外交の二面性を分析
- ◆特集 米中大接近で日本ははずされたか? (長谷川慶太郎、日下公人、霍見芳浩ほか) —サンサーラ
政治生命維持へ日本たたき走るクリントン(霍見)
- ◆特集 香港回収 (朱建米、莫邦富ほか) —世界
香港返還で大陸・台湾との三角関係に激変が(朱)
- ◆米国の新アジア戦略 (ジョセフ・S・ナイ) —世界週報1/7~14、1/21~28
関与政策で中国の国際社会への取り込みを努力する
- ◆対談 ソフトパワーの米・中・日 (入江昭、船橋洋一) —潮
「中国の時代」をプラスに活用すればよい(船橋)

中西 必要な「外側」への目

中西輝政さん 米中関係の修復に対して懐疑論が多かった。そうした中で、両国関係の将来像について比較的はっきりした視点を打ち出しているのは「中央公論」の田中明彦さんの「97年、米中は和解する」です。冷戦後初めて、かなり深い和解が成立するだろうという見通しを踏み込んで論じています。悲観論としては「フォーサイトNO.2」のブルース・ストークスさんの「米中接近は容易には進まない」や、「アステイオン」新年号の小島朋之さんの「アジアの中の日米中関係」、「サンサーラ」の特集「米中大接近で日本ははずされたか」などが、中国側の問題が大きすぎるという条件を強調しています。「エコノミスト」21の特集「赤い香港の未来」、「世界」の特集「香進回収」など、香港返還問題を取り上げたものも多かった。

橋爪大三郎さん 「中央公論」の田中さんの論文は、大変明快でした。朱建米さん 「香港の中国化」か「中国の香港化」かで見解が分かれている中で、「世界」の特集は、中国の可能性を前向きにとらえようとしている点、興味深く読みました。「サンサーラ」の長谷川慶太郎さんと日下公人さんの対談「覇権国家「中国」に翻弄されるな」など、香港の今後について悲観的な見方が多かったのですが、むしろ中国のビジネスチャンスには「中国の香港化」にかけて移民先から香港へ舞い込む「回流」現象が進んでいる。田中さんの論文は、中国が香港返還を経てどう変わるかについて歴史的にまよっていました。岸屋太一さんの「排除されるニッポン」(現代)など、経済的にだけではなく文化的に



右から橋爪大三郎さん、山下悦子さん、中西輝政さん

橋爪 スタンス取れず迷走

ぶない大國にしてはならない。米中日の関係が21世紀の国際情勢を考へるうえで大きな「三角形」として浮かび上がっている。「三角形」は2国関係に比安定が難しいので賢明に対応しなければなりません。田中さんはその点を意識して分析していましたが、朱さんは大きな「三角形」を背景にした香港、台湾、中国大陸という、小さな三角形に注目し、この三つが同じ文明圏に属しながら独自の主体として動いているとしています。ナイさんは3国関係に関する米国のリアルな射程の長い見方を示しています。

山下悦子さん 「香港の中国化」か「中国の香港化」かで見解が分かれている中で、「世界」の特集は、中国の可能性を前向きにとらえようとしている点、興味深く読みました。「サンサーラ」の長谷川慶太郎さんと日下公人さんの対談「覇権国家「中国」に翻弄されるな」など、香港の今後について悲観的な見方が多かったのですが、むしろ中国のビジネスチャンスには「中国の香港化」にかけて移民先から香港へ舞い込む「回流」現象が進んでいる。田中さんの論文は、中国が香港返還を経てどう変わるかについて歴史的にまよっていました。岸屋太一さんの「排除されるニッポン」(現代)など、経済的にだけではなく文化的に

山下 市民の問題に直結

中西さん 日本人は日米中関係を考へる時に、「三角形」の内側に目が行ってしまい、視野が狭まる。ところがその外側には東南アジアも朝鮮半島もあり、ロシアも中東もあるわけで、そこに東南アジアは重要です。山下さん 中国に対する不信感をむき出しにするような論調が多く、船橋さんと日下さんの対談のように、前向きに日本は日本の改革に専念すべきだとする論調は少なかったです。

橋爪さん 「アステイオン」で小島さんは、日本人の対中イメージがほとんど悪くなっているという世論調査の数字を挙げ、中国のことをよく知らないのにイメージばかり悪化しているのは憂慮がきたと述べています。

中西さん 日本人には悲観論を喝望してしまわない機運が溜蓄き、悪循環を自分から作り出している。もう少し骨太な世界観を持てば、中国に対する違和感も少しは解消されると思う。

橋爪さん それは簡単でないと思えます。米中では日本に対する戦勝国です。敗戦国でありながら中国に大きな顔をして進出したという都合の悪い国は日本だけです。敗戦や植民地支配など過去の問題について一人一人が反省を続ける以外にないが、簡単にできる作業ではない。

山下さん 従軍慰安婦問題などをみても、あおり立てるようなイデオロギイ的な論調が多い。「サンサーラ」で霍見さんが指摘しているように、日米中関係や東アジアでの日本のあり方を考える時、結局は「民主社会に不可欠の市民」の誕生といたった日本の国内の問題に結び付くべきなのですが、中西さん 問題は日本のメディアです。米中関係の報道を見ても、昨年3月には「すわ米中対決」で、今は「頭越される」と、右に左に大きく振り子が振れる。メディアも含め日本人のどちらか一方は非常に懐が浅い。

橋爪さん そういふメディアの情報をもとに読者大衆にも責任がある。日本が感情的に迷走するのはスタンスが取れないから。米中に対する関係に心の中で決着がついておらず、「市民」としての自覚がないから、自分の欲望をそのまま正当に要求しているかわらぬ。国際関係でも利益として何を主張すべきかわからない。だから、センセーショナルリズムや土下座外交になり、スタンスと主体性のはっきりしない行動を取ります。あなごられることになる。

山下さん 「現代」で岸屋さんは、日本が自ら表現できない国になっているなど指摘しています。米中やアジアとの関係も、まず日本が官僚の腐敗や安全神話の崩壊といった地盤沈下からイメージチェンジしなければ。

中西さん 日本人が中国やアジアの挑戦の文明的な意味を正しく理解する必要があります。日本が、よって立つ基礎を考へるのだから歴史と文明だと思えます。

橋爪さん 中国を脅威と思うのは、日本人の共感能力が低下している現れだと思えます。今調子が悪いから被害者意識になっていますが、調子がいい時は裏返ってご慢になる。重要なのは被害者意識に駆られて脅威をおおりに立てるのではなく、やるべき国内の改革をしつかりやることです。

▽なかにし・てるまさ 京都大学教授 (国際政治学)

▽はつめ・だいさぶろう 東京工業大学教授 (社会学)

▽やました・えつこ 女性史研究者

自由帳

7日、テレビ朝日の記者(26)が、ゲリラの占拠するペルーの日本大使公邸を「突入」取材するという、驚くべき事件が起こった。

年末にも共同通信のカメラマンらがゲリラの占拠で邸内に入り、人質の解放を遅らせるなど非難を浴びたばかり。未だで知らぬ記者の暴走にはあきれが、そんな記者を訓練

あきれた「突撃取材」

これは、双方を自由に取材するの当然だ。だが、マスコミはいつでも中立でいられるのか。人質を訓練と職業倫理をなされたプロのみである。

なして現場に送った本社の責は重い。日本のマスコミには、思い違いがあるようだ。報道は公正中立、安全も保障される。政府とテロリストが対立してぶちこわしになる。マスコミは事件の当事者なのだ。中立が保障されるのは、カトリックの神父や赤十字など、特別な「自主的に」出国させた。日本のマスコミが名誉と信

海外の安全対策がお粗末な材が誤りだったと認め、テロ事件に即座でできる記者を訓練するのだ。ところがテレビ朝日は、取材が結果として危険を引き起し……天野取締役との気な会話をし、取材チームも時期をみて放映を検討しているという。放映すれば、取材は正しかったという意味になる。いままさか事件解決後も放映はしないことと決定することを望む。

(橋爪大三郎)

雑誌を読む

3月

金融構造改革

- ◆金融崩壊 五つのシナリオ (斎藤精一郎) =文藝春秋
ビッグバン構想より足元の金融危機への対策が先決
- ◆日債銀と北拓銀のXデー (有森隆) =文藝春秋
金融市場拡大と国際化で「バクチ」の才能、が必要に
- ◆「金融債」は保護すべきではない (中北徹) =フォーサイトNo.3
不用意な公的資金導入発言はモラルハザードを招く
- ◆対談 経済成長2%でいいじゃないか (飯田経夫、江坂彰) =諸君!
高度成長のクセが抜けないから不安なだけ (飯田)
- ◆緊急特集 日本の破局 (豊田章一郎、堺屋太一、大前研一、水野野徳ほか) =ボイス
クラッシュを起こせば日本金融を再生できる(大前)
- ◆対談 ビッグバンで市場は守るが、企業は守らない (田原総一朗、神原英資) =サンサーラ
悲観論に潜むアイデンティティ・クライシス(神原)

橋爪 合理性回復を急げ

橋爪大三郎さん 「文藝春秋」の斎藤精一郎さんの「金融崩壊 五つのシナリオ」が全体の見取り図としてよかった。金融構造改革と不良債権問題は別の話だ。構造改革は、家が傾いたら古くなった基礎工事を新しく建て直そうという中長期的課題。それに対して、不良債権はすぐに片付けなければならない「生ゴミ」問題だとしています。竹中蔵さんの「日本版ビッグバン」で何が変わるのか(潮)は、「ビッグバン」の本質をよ



中西輝政さん



山下悦子さん



橋爪大三郎さん

山下 悲観、楽観が対極に

北さんのように、危機を乗り越える方法・手段の提言もありました。もう一つは、金融危機を大したことはない、と打ち消すもので、小堀隆士さんの「株主フル安復合不安症候群(中・央公論)」や飯田・江坂対談、須田さんの論文などです。総じて、具体策をクリアに打ち出したものが少なく、実情紹介やルポ、責任追及だけで終わって

中国の運営に危機感

中西さん 重要なことは、大蔵省や金融界が内向きで国際感覚が乏しい、その結果、大きな利益、国の富を失っていることだ。橋爪さん 日本ペニシズムといいますが、金融システムに関しては「ビッグバン」並みの大改革をしないと生き返れないことははっきりしている。一刻も早く金融システムに合理性を取り戻さなくてはなりません。

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて4月号)

橋爪大三郎	中西 輝政	山下 悦子	編集部
①密約外交の代償—慰安婦問題はなぜこじれたか (櫻井よしこ) =文藝春秋 謝罪を決めた河野洋平、石原信雄氏らに取材。証拠もなしに強制連行を認めた政府の失態	①SFCと漱石と私—慶應義塾大学最終講義 (江藤淳) =ボイス 現在進行中の大学改革のあり方を、根本的な人間観・教育観から改めて問い直す	①特集 「女子保護規定」撤廃 毒か薬か (篠塚英子、福沢恵子ほか) =週刊金曜日3/14 雇用機会均等法と労基法の「改正」案が本格審議に。「保護規定」撤廃の是非について議論	①特集 鄧小平なき中国(H・キッシンジャー、C・パッテン他) =ニューズウィーク3/5 元米国務長官の回想や、香港総督の寄稿を含む充実した特集。中国の将来を多角的に展望
②僕が「新しい歴史教科書をつくる会」を助太刀する理由 (大月隆寛) =正論 「おやじ、でなく」女・子ども、が国家を語らないとダメ。右翼扱いには覚悟して、僕はやる	②それでも日本は海洋国家か (中野不二男) =中央公論 日本海重油事故が暴露した高度技術国家日本の知的・戦略的欠陥を突く	②徹底特集 年金破産・銀行倒産に耐え忍ぶ「護身術」 (横山遜、鎌田祐治ほか) =現代 成長、銀行、土地の3神話が崩壊した時代を生きるための具体策を提示。一読の価値あり	②維新・復古・進歩—「改革」の思想的基盤をもとめて— (坂本多加雄) =発言者 単なる「新しきもの」の創造を超える「改革」の意味を、明治維新を支えた論理から照射する

自由帳

「アジアの世紀」とか、「アジアが危ない」とか言っている間に、世界はアジア以外のところまで再び大きく動き出す徴候があらわれ始めた。もちろん、アジアの発展は今後も長期にわたって続き、その行方は世界的な変化を意味するものを含んでいる。その間には、内包的な変化を意味するものもある。また、鄧小平氏の死や黄長輝書記の任命など、あつた世界をいくつもの「世界」に分けつつあるのと同じ、低くして、再び新しい意味で地球的なインパクトをもち始めた点を発覚しては、地域に及ぶようになり、しか、そのことが一層、見えにくく、会議の最大のテーマは、Nを、除く米国の底流にある世界

世界が再び動き出す徴候

これに対して、「諸君」の対談で飯田さんは日本経済の見方に発想の転換を求め、「規制緩和なんてアメリカの対日要求にすぎない」と主張し、江坂さんも「ビッグバン」について「あわてて前倒ししてやると危険だ」と述べています。また、「サンサーラ」の対談で大蔵省国際金融局長の榊原英資さんは「ビッグバン」について、「2001年までにと言っているが、今世紀中にきてしまおうと思う」と語っています。「ビッグバン」で市場は守るが、企業は守らない。いったい悲観論と楽観論のどちらを信じたらよいか。

中西さん 日本は縦割りの社会で、横の情報が分からない。国民性からいって、戦略判断がヘタでパニックを起こしやすいところがある。「ボイス」の堺屋太一さんと豊田章一郎さんの対談にあるように、本当の意味での才能を殺している教育制度の問題もあります(「魅れ」魅力ある日本)。銀行の決まり切ったことを好む姿勢や、信用の問題で何か事件があると陰でもみ消してしまったりも、一律教育にねたす過剰適応の結果という感じがします。モラルの面でも、「すでに高い生活水準を享受している今の日本人は保護に値しない」という新しい倫理が受け入れられなければならない。

中西さん 重要なことは、大蔵省や金融界が内向きで国際感覚が乏しい、その結果、大きな利益、国の富を失っていることだ。橋爪さん 日本ペニシズムといいますが、金融システムに関しては「ビッグバン」並みの大改革をしないと生き返れないことははっきりしている。一刻も早く金融システムに合理性を取り戻さなくてはなりません。

大前研一さん 大蔵省は、大蔵省の「ボイス」で言尾友成さんは「金融機関の実態をデイスクリンジャーすること、その実態を公表することで、預金者等の自己責任を徹底すること」を提言していますが、国民の中にはまだ、銀行神話がある。情報公開がきちんとなされておらず、自己責任についてもトレーニングされてい

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて5月号)

山下 悦子	中西 輝政	橋爪大三郎	編集部
<p>①植谷雄高の死——「死霊」は現在に届くか(芹沢俊介) —正論 「死霊」の文体の断層に時代の姿を捉えそこの作家の姿を見いだす斬新な追悼評論</p> <p>②対談 だから文学にこだわりたい(石原慎太郎、辻仁成) —中央公論 芥川賞作家辻は故尾崎豊と音楽仲間。「NY」に行ったら尾崎のことを書こうと思っている」</p>	<p>①「中国脅威論」に惑わされるな(R・ロス) —中央公論 アメリカの主流派の中にある慎重で賢明な中国観として重要</p> <p>②対談 「NO」といえる中高年(江坂彰、堀紘一) —ボイス 無責任な経営者と、いまだに学歴志向の教育ママに対する警告</p>	<p>①集中連載 公安警察 VS オウム——日本の治安、かくして崩壊す(川邊克朗) —現代 早くからオウムをマークしながら相手を甘く見て、タイミングを逸した公安警察の舞台裏</p> <p>②融解を速める「社会主義」(渡辺利夫) —中央公論 鄧小平亡き社会主義市場経済は国有企業解体→共産党の行き詰まり→経済破局へ進む?</p>	<p>①東京裁判をやり過ごした日本人(関野野) —論座 近代の自由主義の基本である法の論理と罪の論理から、「自由主義史観」を原理的に批判</p> <p>②大杉栄 自由への疾走<完結編>(鎌田慧) —へるめす 大正期活躍したアナキストの生涯を伝えた。現地取材などを通し綿密に検証。前号の続き</p>

雑誌を読む

4月

- 「沖縄」の論じ方
- ◆日本はアメリカの植民地か! (ビル・トッテン) —文藝春秋
「打ち出の小づち」の役割を負う日本は今も米国の植民地
 - ◆沖縄県民よ、甘えるな (眞榮城守定) —文藝春秋
経済発展の阻害要因は基地より公共事業への安住だ
 - ◆沖縄 草の根の声を聞け (島田晴雄) —中央公論
本土が沖縄の痛みとコストを分かち合う必要がある
 - ◆沖縄「反基地運動家」の呆れた正体 (惠隆之介) —諸君!
反基地運動の思想的リーダーがチュチュ思想を信奉
 - ◆憲法の精神と沖縄の現実 (新崎盛暲) —潮
手続き進行中に法改正されるのでは法治国家でない
 - ◆沖縄に忍び寄る朝・中・台の影 —選択4月号
沖縄を中心とした経済圏構想に潜む「琉球独立論」

中西少ない安保環境論

中西輝政さん 沖縄の米軍基地をめぐって駐留軍用地特別措置法の改正問題が日本の政治を揺るがしています。今月の雑誌では、沖縄県民の日常生活や経済発展の問題など基地の矛盾・重圧をルポふうに取り上げたものが多かった。「文藝春秋」の眞榮城守定さんの「沖縄県民よ、甘えるな」や「潮」の新崎盛暲さんの「憲法の精神と沖縄の現実」、論座の佐藤木俊郎さんの「すしり重い沖縄の旅」復帰四半世紀への刃」などです。日米安保体制やアジアの安保環境をどう考えるかを本格的に取り上げた論文はなかった。特に、海兵隊撤退論などを軍事専門家がかちどろと議論したものは登場していません。二番目に、議論が反戦地主義運動の担い手の問題に集中して、「諸君」の惠隆之介さんの「沖縄「反基地運動家」の呆れた正体」や「文藝春秋」の佐久間哲さんの「風化する座布団」の反戦論などがそうです。新崎さんや佐久間さん(「沖縄と平和憲法」)も「反基地運動家」など運動している側の論文も、視野は違いますが、運動の主体からの目を紹介したものと、同じグループに挙げられます。また、本土の責任を論じたものが少ない中で、沖縄問題懇談会の座長を務める高田晴雄さんの「沖縄 草の根の声を聞け」(中央公論)を注目で読みました。沖縄の負担を軽減しなければという問題意識から、各市町村の状況などを紹介しています。米側でこの問題がどうとらえられているか、日本のマスコミが注目してきませんでした。

橋爪大三郎さん 沖縄については、基地が多くて気の毒だ、申し訳ないといったイメージが本土側にあり、突っ込んだことが言いにくいというパターンがある。そのパターンを委ねようとするルポが目立った。例えば「文藝春秋」の佐久間さんの論文は、3000

人の反戦地主義の大部分が無関心層であることなどを示し、本土で受け取られかねないイメージがあまりに単純だと教えてくれる。「諸君」の惠隆さんが、なぜか沖縄で影響力のある言論人が亡命した朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の黄書記が来日した時のシンポジウムで活躍していたことなどを挙げていて、この問題には意外な国際的な

広がりがあり、あまりナイーブに国内の問題として考えてもいけないと思えました。しかし、そのうえどうするかという議論はほとんどなかった。山下悦子さん 惠さんの論文「選択4月号」の「沖縄に忍び寄る朝・中・台の影」などは、国際情勢の中で基地問題に潜む政治的背景を指摘して「反戦基地運動家」に限定されて、戦後50年の間、基地を生活の中



がみの構造をみています。基地の重圧を少しでも軽減して沖縄の経済発展を推進していく動きが当面ないが、経済発展すればするほど、ますます基地に耐えられなくなるという因果関係も知る必要がある。「世界」の仲田博也さんの法の支配を棄てる特措法改正」や、「週刊金曜日」4/4の辻元清美さんの「試合の途中でルール変更」そんな「特措法改正」には反対」は、後で作った法律で今進んでいる論理を無効にする立法がある種のルール違反である点はその通りですが、さまたげな議論に思えます。本土の側には安保支持論が強いわけですが、支持した基地を受け入れなければならぬ。また、沖縄の米軍は、米軍がいつまで中国を封じ込められる態勢を保っておきたいという意思の現れです。日本が中国と戦略的対決の態勢に入っているのかという議論をすすめて、これが背景にあるもう一つの核心です。

橋爪さん 沖縄の特殊性は、日本に復帰するまで米軍に占領され軍政下にあったことにあります。復帰当時の冷戦下では基地が縮小される条件はあまりなかったのではないかと。また、中国や北朝鮮、台湾に対する位置から、地

橋爪 定型的発想破るルポ

山下 経済発展を阻む基地

山下さん 「軍事目的最優先で地区の平坦な一等地が収用されたため、地域の経済、交通、生活上のいわば生態系が分断され、経済活動や人々の生活が著しく阻害され抑制されている」という島田さんの指摘は重要で、政府がこれら沖縄に対して社会資本が立ち遅れている状況を取り戻せるのか。橋爪さん 嘉手納町は80%が飛行場で発展のしようがないし、金武町などもそうです。だが、那覇市など影響の少ないところもある。残りの場所ですることをやらないという眞榮城さんの議論は説得力を感じます。

自由帳

3月11日、東海村の動燃(動力炉・核燃料開発事業団)事業所で火災が発生。鎮火したはずが、残りの火がアスファルトに引火し爆発、低レベル放射能が飛び散る大事故となった(サンデー毎日4/6)ウソつき動燃の「義務と演技」など。この動燃は、鎮火の確認を怠る通報も遅れたなどの不手際に加え、虚偽報告

動燃をどう再生させるか

や口止め工作を行っていたことが判明、4月16日に科学技術庁は告発に踏み切った。国民の安全をこまめに、組織防衛を優先させてしまった動燃の体質に、非難が集まっています。動燃の解体・再編は、やむをえない。ただし、看板を掛けかえ組織をいじくっただけで、まともな組織になることを期待するならば、失敗の原因を究明すべきだ。

なせならなったのか。それは動燃が、あえて言えば、ほとんどの官庁や企業と同じ組織だったから。同僚の失敗をかばう。よその部署や外部の人組みの思想で設計されているように、組織にも二重・三層のチェック機構が必要である。だが、原子炉や核燃料を扱っている。重のチェックが必要である。連の軍隊は、間違っても反乱を起こさないよう、司令官と政治委員(共産党員)が要らないと思ってしまう。(橋爪大三郎)

(橋爪大三郎)

雑誌を読む

6月

青木前大使バッシング

- ◆我、ペルーの土と化すとも (青木盛久) —文藝春秋
バッシングの渦中の人物が書いた詳細な事件の手記
- ◆検証 公邸突入と日本外交 (川見勝男) —世界
日本の大使、領事は「エンペラーのように振る舞う」
- ◆「青木叩き」と情緒報道の歪み (井沢元彦) —This is 読売
無事救出まで責任追及を控えていたなら無用の遠慮
- ◆いま、あえて青木大使擁護論 (石川好) —宝石
事前に武力突入の要請があった時の準備こそが問題
- ◆特集 検証！ペルー報道—フジモリ礼賛報道の危険 (人見剛史、原田浩司、浅野健一ほか) —創
バッシングは青木氏に責任を転嫁したことに(浅野)
- ◆対談 愛国心について (大塚英志、福田和也) —中央公論
保守論壇全体があまりにも世論に墮している(福田)

中西解決後の急転は問題

中西輝政さん、ペルー人質事件での青木前大使のバッシングに関しては、論点が三つあります。一つは警備上の責任。もう一つは、青木氏と日本の外務省が「平和的解決」を唱え続けたこと。三つ目は、青木氏の人格に対する個人的攻撃。本来は別問題の三つが絡まっている。このうち最も大事なポイントには、専ら平和解決を志向することの是非です。一般的に在外公館や日本企業がテロの対象となった時にどう対処すべきか。青木氏自身、「文藝春秋」



橋爪大三郎さん



山下悦子さん



中西輝政さん

山下背景に庶民のおん念

橋爪 保守的言論、流行に
中西さん、保守的言論は本来、責任の重いもの、という自覚が大切。問題はサブカルチャー的なところから出てきたある種の軽蔑です。例えば、1980年代の日本の新しい国家主義は、明治・大正期の国家主義とは似ても似つかないサブカルチャー的なもので、それを軍部が利用し左翼もそれに乗った。その点、橋本首相が強行突入直後の記者会見で、日本政府の承諾なく日本の領土である大使公邸に突入したことに対して「遺憾の意を申し上げた」と述べたのは、日本の国家としての体面を守るどころか、ギリギリの一言だったと思います。

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて7月号)

橋爪大三郎	山下悦子	中西輝政	編集部
①村上春樹と麻原彰晃 (大塚英志) —ボイス 地下鉄サリンの記録「アンダーグラウンド」は、成功したサブカル批判か、凡庸な転向か ②「T・K (小室哲哉)」はなぜ巨大産業に化けたのか (滝田誠一郎) —現代 メガヒット連発の秘密はカラオケBOXとシンセサイザー。「聞かれる」ことへのこだわり	①48歳ビジネスマンが書き残した「余命百日」のスケジュール表 (加藤仁) —諸君! がん告知をも「死の準備」という大仕事にかえてしまう猛烈サラリーマンの闘病日誌 ②対談「移植OK」で始まる臓器争奪地獄 (近藤誠、中島みち) —文藝春秋 臓器移植法が成立した。患者の権利、自衛の立場から脳死や移植の是非を問う必読対談	①特集 米中徹底対論 (R・マンロー、張小波) —This is 読売 米中対立は深まるか。両国の強硬派による論戦だが、日本にとり第一の関心事 ②絶対不敗の技術力 (唐津一) —ボイス 今の日本には自信回復が必要。製造業の活力こそ国力の基盤であることを教える	①文明の衝突か、相互学習か (佐藤誠三郎) —アステイオン夏号 産業化とナショナリズムという近代化の根本的な動向から、ハンティントン分析を批判 ②「死刑判決?私には関心がない」 (宮崎勤) —創 連続幼女殺害事件で死刑判決を受けた被告に判決後、文書を通じて行われたインタビュー

の手記「我、ペルーの土と化すとも」で個人的責任や自分の思いは述べていますが、この問題については議論の先送り行われていく嫌がある。一方、この事件から国家論を展開したが、江藤淳さんの「総理と天使の不機嫌(国ごっこ)」「諸君、や、佐伯啓思さんと松本健一さんの対談(漂流罪と国家意識)」「正論」などです。ペルーの政治状況を考えれば武力解決はなかったわけですが、井沢元彦さんの「青木叩き」と情緒報道の歪み(T his is 読売)は日本のジャーナリズムが事前にその見通しを書けなかった理由を、日本人の「言霊」の文化に触れながら述べています。また、メディアの青木氏バッシングが急転した現象を問題にし、事件解決前から青木氏の責任を問うべきで、解決後に責任を問うのはおかしと指摘しているのは重要です。武力突入に対しては、「世界」の川見勝男さんの「検証 公邸突入と日本外交」や大塚和雄さんの「武力突入しかりえなかったの

省や厚生省の不祥事などが続いた後に、今度は外務省の大使の実態が事件を通して見えてきた。だからマスコミがバッシングするの支持されたと思う。「世界」で川見さんは「エンペラーのように振る舞う大使たち」と指摘し、橋田枝里さんは「私に「平気でうそをついた」青木大使の傲慢」(諸君)で外交官の村上意図を批判、徳岡孝夫さんも「新潮45」6月号で歴史的な例を挙げ、「立派な人もいるが、一般に日本の外交官の眼中には「民」も「国家」もない」としています(「覚悟」の研究)。国家の問題では、福田和也さんが社説で成さんとの対談「暴力に対する想像力」(ボイ)で「シヨックだったのは、日本国の総理が始めから終わりで一度も戦う姿勢を見せなかった」と述べています。危機管理や国家の問題について、従来の保守の枠組みにすぎない若い世代のいざなひが語られている。事件の解決の仕方にも国としての責任主体がないと、危機感を持つ人が多かった。

自由帳

ある知人が、「最近のヨロロッパの動きは、どうも不可解だ」と語った。五月のイギリス総選挙で保守が大敗し、十八年ぶりに労働党政権が生まれた。そして六月には、フランスでも社会党内閣の登場を見た。その結果、EU加盟の十五カ国中、十三カ国で、従来「左派」と目されてきた政界が政権に参加している。

左派勝利という「反作用」

と。八〇年代から続いた保守優位の流れが大きな転換期に至ったのか。ペーリンの壁が崩壊して、社民路線も含め左派や社会主義は、すでに歴史的な退潮の流れにある。英

と。保守優位の流れが大きな転換期に至ったのか。ペーリンの壁が崩壊して、社民路線も含め左派や社会主義は、すでに歴史的な退潮の流れにある。英

(中西輝政)

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて8月号)

橋爪大三郎	中西 輝政	山下 悦子	編集部
<p>①特集 朝鮮半島 乱気流 (W・テイラー、朱建栄、李英和ほか) —This is 読売 専門家15人の近未来予測はけっこうばらばら。予断できぬ状況のなか、軌えが進行する</p> <p>②「酒鬼薔薇」はボクの代わりに捕まった (岡田斗司夫、大槻ケンヂ) —週刊アスキー7/21 皆の代表で捕まってくれた彼はイエス・キリストのようなもの、と両氏。それも真実かも</p>	<p>①米中関係が香港の将来を決める (H・ハーディング) —This is 読売 アメリカの視点からではあるが、各種の香港論の中で、最も急所を押さえた好論</p> <p>②ビッグバンは大丈夫か (藤井良広) —中央公論 日本の金融界にとって、ビッグバンがビッグクランチ(金融大混乱)にならないために</p>	<p>①特集 アジア・プロブレム (原洋之介、佐伯啓思、高澤秀次、桂秀実ほか) —発言者 国柄に見合った経済システム、開発主義はアジアの価値を残すのか……新アジア論が満載</p> <p>②保育園が変わる (今井文恵) —世界 6月の児童福祉法改正で保育園における国の責任は大きく後退する。保育園の今後を分析</p>	<p>①特集 沖縄独立をシミュレーションする (小川和久、姜尚中ほか) —広告批評7・8月号 国家の枠組みが崩れつつある中で、州制度導入など現実的な「独立」の可能性を検証する</p> <p>②対談 日本研究と文化研究 (H・ハルトゥーニアン、酒井直樹) —思想 「植民地的構造」をほらむ日本研究を批判しカルチュラル・スタディーズの重要性を探る</p>

雑誌を読む

7月

小学生連続殺傷事件

- ◆子どもたちはなぜ暴力に走るのか (芹沢俊介) —世界 いのちを絶対とする価値観から浮遊する子どもたち
- ◆「酒鬼薔薇」少年 十四歳の衝撃 (小田晋) —This is 読売 社会・教育一般の問題に拡散すると、本質を見誤る
- ◆酒鬼薔薇聖斗は時代の子か異常者か (高村薫、野田正彰) —文藝春秋 若者の人生のモチベーション喪失は日本的(野田)
- ◆連続対論「かくて『悪魔』は解き放たれた」(吉岡忍、日野啓三、小西聖子、大澤真幸ほか) —現代 「欠如」の欠如が自己顕示的な欲求の動機に(大澤)
- ◆「理由なき」犯罪 (野坂昭如) —ポイス 「群れへの埋没で自分を確立する」子供たちの矛盾
- ◆頭部第一発見者を「容疑者扱い」した大新聞 —週刊文春7/17 「第二の松本サリン」になりにかえなかつた取材攻勢

山下悦子さん 捕って何だったのか

山下悦子さん 神戸の小学生殺人事件は、容疑者の少年と同じ1982年生まれの子供を持つ身として、逮捕はショックで、逮捕前、雑誌も新聞・テレビも容疑者像を30、40代として、目撃談などを報道していたわけ、そうした情報の流れも問われない。『週刊文春7/17』によると、第一発見者を疑ったり、フイダショーの取材で情報ほしさに中学生に現金を支払われたりといったことも、過熱した報道の舞台裏であったよ



山下悦子さん



中西輝政さん



橋爪大三郎さん

橋爪 方向感覚失った社会

捕と聞いて、大変驚きました。小田さんと野田さんとは、同じ精神医学者でありながら立場がかなり違っています。小田さんは、事件は個別的な要素が極めて高いのだから社会的影響や教育の問題に一般化してしまっている、少年法を改正しても容疑者が簡単に社会に復帰できないように手を打ったほうがよいとする。これに対して、野田さん

中西 健全さを保つる岐路に

子への愛の過程。なご少年に関する情報を書いていたが、この事件では、家族とは何だったのかと考へられます。80年代以降の日本の家族は空疎化し、再生産システムがうまく機能していません。一見平和な家庭にもいろいろな問題がある。失楽園「不機嫌な現実」など不倫ものがヒットしているのは戦後の近代的家族像が破綻している証拠で、こうした状況が何らかの形で影響している気がする。

自由帳

新潮社の写真週刊誌「フォークス7/9」が、神戸小6殺人事件の容疑者である少年の顔写真を掲載した。明白な少年法違反である。これに対し、キオスクなど販売店やコンビニ、大手書店などが販売中止を決定。販売した書店ではたちまち売り切れ、日本中の店頭から同誌が姿を消す騒

フォークスの顔写真

げ、検討していきたい。しかし、我々は抽象論やテーマエド物を言おうとは思わない。現実の、個々のケースに即して考え、何をすべきかを決定するまでの全経過と対峙して、何をすべきかを決定する。フォークスの顔写真は、検討していきたい。しかし、我々は抽象論やテーマエド物を言おうとは思わない。現実の、個々のケースに即して考え、何をすべきかを決定する。フォークスの顔写真は、検討していきたい。しかし、我々は抽象論やテーマエド物を言おうとは思わない。現実の、個々のケースに即して考え、何をすべきかを決定する。

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて9月号)

中西 輝政	山下 悦子	橋爪大三郎	編集部
①スハルト以後のインドネシア (A・シュワル) —中央公論 朝鮮半島・台湾海峡と並ぶアジアの不安定要因となってきたインドネシア情勢をレポート	①医療費値上げの前に必要なこと・上(岩上安身) —世界 年平均33億円の不正請求をそのままに、患者の自己負担増を軸にした新保険制度への疑問	①知的亡国論(立花隆) —文藝春秋 全国の大学が教養部を廃止中。一般教養(リベラル・アーツ)の軽視は日本を滅ぼす過ち	①論議 歴史教科書、これだけは言いたい(山崎正和、坂本多加雄) —This is 読売 国家、教育、歴史は両義的な存在。ゆえに国家は歴史の評価にかかわるべきでない(山崎)
②橋本「米国債発言」の真意(高尾義一) —ボイス 現在のアメリカの「繁栄」が、きわどい綱渡りの本質をもつものであることを論じる	②家庭科教科書に見る「家庭の崩壊」(佐藤光) —This is 読売 検定不合格となった4点の高校家庭科教科書の検証を通して、現代家族像のあり様を見る	②沖縄の未来像を考える(佐々木雅幸、高良倉吉、浜下武志、我部政明ほか) —世界 国際都市、自由貿易地域構想など、日本という国から世界の沖繩へ飛躍する提案の数々	②仮面中学生うむ「いい子競争」—アエラ7/28 「内申書」重視の高校入試の重圧の下で、中学生に浸透する「内申アップ」のマニュアル

雑誌を読む

8月

「子供」と戦後社会

- ◆寂しい国の殺人(村上龍) —文藝春秋
近代化が終わり、目標を失った「寂しさ」が原因だ
- ◆対談 子供は権威に飢えている(渡部昇一、和田秀樹) —ボイス
非行に走るのは母親が父親の悪口を言う家(渡部)
- ◆対談 子どもへの「暴力」に立ち向かう(森田ゆり、斎藤次郎) —世界
子供がすさんでいるのは「孤立」の表現だ(森田)
- ◆「心の教育」で子供は救えない(野田正彰) —潮
「人材」の発想をやめ、可能性を開花させる教育に
- ◆戦後社会はA少年に対抗できるのか(佐伯啓思) —正論
「人権」や「平等」に子供はリアリティーを感じない
- ◆灰谷健次郎氏が隠したもの(福田和也) —週刊文春7/31
命の大切さという戦後日本人のスローガンは欺瞞だ

山下 戦後の「得失」検証を

橋爪大三郎さん 今月も神戸の事件を取り上げた雑誌が多くありました。興味をひかれた「つは村上龍さんの「寂しい国の殺人」(文藝春秋)です。「悲しい」という感情を軸に人々の連帯が形作られていた戦後復興から高度成長の時代が終わり、今は目標を喪失して「寂し」をキーワードとする個人が孤立した時代に至っているといえます。ベストセラー「甘えの構造」の著者、土居健郎さんは「神戸少年殺人事件に思う」(ボイス)で、やはり



山下悦子さん



中西輝政さん

中西 価値観の分裂浮上

このごろのような事件を生み出したなどとしていますが、家族の中で子供の教育や再生産のシステムを動かしているのは、女と男の関係性です。どちらかが悪いというところにはならない。母親のせいにするのは簡単ですが、父親のあり方の批判や反省がないのはおかしい。森田ゆりさんと斎藤次郎さんの対談「子どもへの「暴力」に立ち向

橋爪 閉塞感打破が課題

と事件まで共通して見られるように、暴力にはものすごく弱い体質です。企業にも父親がいらないわけです。そういう戦後日本の精神的特質についての議論として、こうした「母親」論は見ることもできると思います。

山下さん 「週刊文春」で福田和也さんは「人間の善性の象徴としての子供」を描いてきた灰谷健次郎さんが、そう描いた戦後の子供像を描く「事件の本質を掘り起こす」として、「フォーカス」を糾弾する行動に出た、としています。戦後社会を全面否定してしまっている問題だと思えますが、戦後が獲得してきたものと失ってしまったものを検証し、何が失われ、なぜ失われたのか問われなければなりません。

橋爪さん 「特異な人間による犯行だから社会的背景は考えなくてもいい」という見方は、「社会的背景を十分踏まえなければ事件の構造は理解できません」。



橋爪大三郎さん

はしづめ、だいたいさかづつ、東京工業大学教授(社会学)

やました、えつこ、女性史研究家

なかにし、てるまさ、京都大学教授(国際政治学)

自由帳

八月一日、永山則夫死刑囚が絞首刑となった。享年四十八歳。八月十四日、死刑囚として異例の告別式が催された。死刑判決確定から七年たっているとはいえ、告知されてから数十分後の刑執行だったと、批判も出ている。

待たれる「華」の刊行

十一日だったというから、本に突然のことだったのだらう。手紙を出すお金にも困っていたという。

私刑が執行されたことをニュースで知ったのだが、あまりにも突然だったので、正直は、永山則夫君を、東京拘置

所の絞首台にぶら下げて、殺と無関係ではないことを憤りが「作家」でもあった。「無務め、現在に至るまで接見や手紙のやりとりをしてきた遠藤誠弁護士(す)ら、七月十六日に彼からもらった手紙に対する報告を出したのが七月三日」。

「無期懲役」の判決(一九八一年)でも問題はなかった。彼は三人ともに永山君を選んだ」と未成年者の犯罪に重罰をもって臨めといった風潮ではないかと思う。

彼が、「死刑囚」ではある

(山下 悦子)

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて11月号)

橋爪大三郎	山下悦子	中西輝政	編集部
①特集「地球環境をいかに守るか」 —月刊keidanren10月号 国連の京都会議をまえに、地球温暖化の見通し、炭素税、排出権などをわかりやすく紹介	①「父」の不在は夫婦関係の不在(芹沢俊介) —潮 特別企画「父親はどこにいる」の中の一編。混迷する家族を「父」に視点を置いて洞察する	①「張作霖爆殺」の全容 —This is 読売 満州事変や15年戦争論、さらには東京裁判の立論にも影響を及ぼしうる第1級の資料発掘	①民族の物語はどうか可能か(松本健一) —正論 歴史を書くことと歴史教科書をつくることとの違いを通し「つくる会」のスタンスを批判
②特集「ビッグバン大戦争」(中島みなみ、リチャード・クー、水野隆徳ほか) —文藝春秋 待ったなしの金融改革。大蔵省の舞台裏を描く中島論文、危ない機関一覽の水野論文など	②特集「私たちは何を食べているのか」(秋山豊寛、安田節子、大澤勝次ほか) —世界 輸入に頼る食生活の安全性を問う。遺伝子組み換え作物、狂牛病など恐るべき現状に迫る	②グローバル・エコノミーと国民国家(ピーター・ドラッカー) —中央公論 「21世紀も依然、主権的国民国家の重要性が続く」とグローバルリズム論の大御所が訴える	②近代としての20世紀(キャロル・グラック) —世界 日本の「戦後」の特徴を冷戦、進歩的など5つに類別し、近代としての戦後の意味を問う

雑誌を読む

10月

北朝鮮への視点

- ◆特集 朝鮮半島97秋(重村智計、小此木政夫、朱建栄、鈴木典幸、渡辺利夫) —中央公論
総書記就任などで新パワーゲームが始まった(重村)
- ◆金正日の次の一手(武貞秀士) —ポイス
「反金正日派」が存在しない北朝鮮の体制の奇妙さ
- ◆北朝鮮を見捨てる在日商人たち(出井康博) —フォーサイトNo9
「統一朝鮮」すらさめた目で見るドライな二世たち
- ◆「飢餓難民」が中朝国境を越える(石丸次郎) —アエラ10/6
約80カ所の越境ポイントから流出する飢餓難民の声
- ◆日本人妻里帰り「帰国」礼賛者たちの罪と罰(宮塚利雄) —諸君!
「過去の清算」実現へ最も出しやすい里帰りカード
- ◆黄長燁元書記「怒りの手記」全文入手(解説・恵谷治) —サビオ10/22
「主体年号」使用を「封建主義的臭いが漂う」と批判

中西分析に一定の成熟



中西 輝政さん



橋爪大三郎さん



山下悦子さん

橋爪 死活的利害考えよ

中西輝政さん 朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の金正日総書記就任と日本人配偶者の里帰り問題や日本人拉致疑惑、食糧危機、さらには日米ガイドラインの見直しなどが重なり、各種誌が特集を組むなどしている。中でも「中央公論」の特集「朝鮮半島97秋」は精力的だ。重村智計さんの「戦略的朝鮮半島論議のすすめ」は、米中の対抗を軸にした大きな構図を問題にし、小此木政夫さんの「金大中が勝つてどうなる」は、大統領選をめぐる韓国国内の混乱を描いている。朱建栄さんの「中国の恩恵と計算」は中国の新しい関与の動きを論じている。こうした大きな状況論の一方で、鈴木典幸さんの「北のメディアは何を伝えているか」は北朝鮮の公的メディアの報道をフォロワー、渡辺利夫さんの「いつまでもつか北朝鮮経済」も自分の訪朝経験を踏まえ低い目線で書いています。他の雑誌では、北朝鮮の権力マトリックスを載せた武貞秀士さんの「金正日の次の一手(ポイス)」が目玉を引きました。総書記就任の分析としては、「アエラ10/6」の「総書記就任」へ四つの必然がまとまっています。日本の北朝鮮報道が厚みを増してきたと感じさせるのが出井康博さんの「北朝鮮を見捨てる在日商人たち」(フォーサイトNo9)で、在日朝鮮人の「金正日離れ」やドライな二世たちを描いています。石丸次郎さんの「飢餓難民」が中朝国境を越える(アエラ10/6)も、飢餓に苦しむ人々の肉声を伝えています。真真さんの「最新事情 金」

山下 論議に取っつき難さ

の混乱を描いている。朱建栄さんの「中国の恩恵と計算」は中国の新しい関与の動きを論じている。こうした大きな状況論の一方で、鈴木典幸さんの「北のメディアは何を伝えているか」は北朝鮮の公的メディアの報道をフォロワー、渡辺利夫さんの「いつまでもつか北朝鮮経済」も自分の訪朝経験を踏まえ低い目線で書いています。他の雑誌では、北朝鮮の権力マトリックスを載せた武貞秀士さんの「金正日の次の一手(ポイス)」が目玉を引きました。総書記就任の分析としては、「アエラ10/6」の「総書記就任」へ四つの必然がまとまっています。日本の北朝鮮報道が厚みを増してきたと感じさせるのが出井康博さんの「北朝鮮を見捨てる在日商人たち」(フォーサイトNo9)で、在日朝鮮人の「金正日離れ」やドライな二世たちを描いています。石丸次郎さんの「飢餓難民」が中朝国境を越える(アエラ10/6)も、飢餓に苦しむ人々の肉声を伝えています。真真さんの「最新事情 金」

ら援助すべきだとするものと、西岡力さんの「北朝鮮「食糧支援」の危険」(ポイス)のように軍事独裁政権の権威に押されることによる問題だとするもの、その中間に、小此木さんの「管理された飢餓」金正日・北朝鮮のつぎの(潮)のように、人道援助と政策的援助のメリハリをつけるべきだとするものがある。しかし、実際どうすればいいのかが今一つ見えてこない。次に、ガイドラインの問題で、朱さんが指摘するように、中国には中国、韓国には韓国の視点があり、当然日本にも日本の視点があればならない。そこから具体的な選択肢を考えていく現実的な議論が欲しい。北朝鮮の内情については、武貞さんがすべての北朝鮮幹部は金正日派で、反金正日派はないと述べています。その通りでしょうか。だから金正日体制は万全、とはいえない。反抗の道が封じられているが故に、人々の内部には「反金正日」の膨大なエネルギーが蓄積されていると思う。その一つの例が、

自由帳

5%ではなまぬるい

「気候変動枠組条約第三回締約国会議」という長い名前の会議が、まもなく京都で開かれる。石油や石炭を燃やして出ている炭酸ガスのせいで、地球が温まるといって、今このうちにストップをかけようという相談だ。なぜ炭酸ガスが地球を温めるのかという理屈や、地球環境への影響は「月刊keidanren」の10月号(詳しく)とどこの会議をとりまじめようが議長国をとめる。よって、一九九〇年比で5%削減という入控えめな目標を掲げようとしている。わかつた「アメリカはやる気なし」だ。「ニューズウィーク10/22」な炭酸ガス濃度が急増して、アメリカ経済は、石油な

(橋爪大三郎)

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて12月号)

橋爪大三郎	山下悦子	中西輝政	編集部
①座談会「アジアのナショナリズムはどこへ向かうか？」(姜昌一、山室信一ほか) —世界経済成長とともに強まるアジアのナショナリズム。あるべき協力関係を各国の学者が討論 ②「南京大虐殺」をどう読むか(福田和也) —諸君！ジョン・ラベ日記を読む。日本兵の蛮行を省み、加害者として自らの罪を認める誇りを	①死刑囚永山則夫の「最後のノート」(遠藤誠、藤森研、阿部晴政ほか) —論座死刑が確定した90年からのノート24冊のうちほんの一部の掲載なのが物足りないが…… ②対談 環境NGOはいま何をすべきか(堂本暁子、M・ペロー) —世界地球温暖化防止京都会議を前にした必見の特集「CO ₂ —どうすれば減らせるか」の1編	①行政改革とは何か(加藤寛) —ボイス行革がギリギリのかけっぶりがある今、その原点を再度強力で訴える議論 ②郵政民営化 火だるまの攻防(向谷進&特別取材班) —文藝春秋このまま「幻に終わる」かも知れない行革への危機感から、密室の攻防を鋭くえぐり出す	①28年前の「酒鬼薔薇」は今(奥野修司) —文藝春秋当時15歳の高校生が起こした同級生惨殺事件のその後をたどり、少年法の問題を提起する ②緊急企画 30歳以下のための新ガイドライン入門(野坂昭如、田中明彦) —広告批評11月号日米防衛協力のための新指針の意味を反対・賛成双方の論客が分かりやすい言葉で再検討

雑誌を読む

11月

株暴落と景気失速

- ◆大不況を覚悟せよ(水谷研治) —文藝春秋 右肩下がりを迎えた。改革を行い5年間は耐え忍べ
- ◆未曾有の大恐慌がやってきた(グループ21) —現代 今の日本は60年前の世界恐慌下の米国にそっくりだ
- ◆「世界同時株安」で日本が敗れた「情報戦」(小暮史章) —フォーサイトNo11 「情報本位制」下の世界市場はリスク転嫁ゲームの場
- ◆「下降線」をたどり続けるほかない日本(ピーター・タスカ) —フォーサイトNo11 底に落ちないと「改革」に向かう危機感を生みえない
- ◆平成大不況の深層(高尾義一) —ボイス 当局の景気判断には、歴史的な感覚が欠如している
- ◆東大阪工場群は不況知らず(中沢孝夫) —中央公論 基盤技術の厚みのうえに成立する起業家の「孵化器」
- ◆特集 株価激震 —アエラ11/10 含み益消失による金融機関の貸し渋りが不安を増幅

橋爪前向き施策、打ち出せ

橋爪大三郎さん 10月の世界同時株暴落が追い打ちをかけて日本経済は一段と底冷えする事態になっていく。政府も最近、景気判断を「緩やかな回復」から「足踏み状態」に変えましたが、単なる景気循環による後退局面ではなく、そこには構造的な要因がある。不況に直面し乗り越えていくため目先の手段にとらわれずに我慢せよと訴えかけるものに共感しました。水谷研治さんの「大不況を覚悟せよ」(文藝春秋)は、目先の景気対策で財政支出を求める圧力は強くなるけれども、むしろ政府は歳出のカットをきちんとやり、消費税も20%まで引き上げ、5年間は耐え忍ぶべきとする処方せんです。もう一つは、「現代」の「未曾有の大恐慌がやってきた」(グループ21)で、グローバルスタンダードを取り入れて世界と競争できる体制の経済を作り直し、一から出直しという提案です。総じて、構造不況の原因や対策について、自信を持ってこれたことと納得させるものが見当たらない。

中西 価値観の变革が必要

中西輝政さん 月刊誌は、株暴落以前に状況を踏まえて編集されているので、レトリックだけは強いが、まだ危機感が薄いと感じました。一時1万5000円割れた株価水準などを考えれば、世界恐慌に匹敵する事態が起こってもおかしくない。金融システム維持のための公的資金投入が必要になっていっている。住専問題の時の国民の反対を考えると、政治家は手打っていない。これが危機の本質ではないか。今の危機をどう管理するかという短期的課題と、長期的に規制緩和・行革を進め、財政再建の足場を固める必要もある。繁栄の夢は終わって歴史的に大きな衰退期に入り始めている。

山下 国民全体が危機感を

山下悦子さん 小暮史章さんの「世界同時株安」で日本が敗れた「情報戦」(フォーサイトNo11)が10年前のブラクマンデーの連日を描き、「インターネット」という電脳空間で起きた初の株式相場の波乱である」としています。ピーター・タスカさんは「下降線」をたどり続けるほかない日本」(同)で、「日本人は危機感を持つことが必要だと指摘していますが、日本は個人の投資家が割前前後と少ないのでまだ危機感がないのかも知れない。国際競争を生み出すための改革や政治のあり方が後手に回っている」と。政治や官僚だけでなく国民全体が危機感を持つべきでしょう。「未曾有の大恐慌がやってきた」は分かりやすかった。既に「平成恐慌」に突入しているという認識で、「世界恐慌下



(左から) 中西輝政さん、山下悦子さん、橋爪大三郎さん—毎日新聞東京本社で

自由帳

来月6月にフランスで開催される今世紀最後のW杯をめぐってのイランVS日本のサッカー戦は視聴率47.0%に達し、デオ・リサーチ関東地区、瞬間最高では、延長戦に入る直前に57.7%を記録した。わが家でもスポーツ好きの子供達の歓声が深夜まで響いていた。熱狂的なサポーターの存在で有名な浦和レッズの本

サッカーという快楽

ラウンドを埋めつくした日本のサポーター達の姿が家の子供達の姿と重なると、この現象は「体なだ」と考

20世紀最後のW杯のために、フランス行きのゴールを決めた「野人阿野」が浦和レッズの選手といふこともあって、龍太氏によれば、国家原理に従属してきた近代サッカーは、今やナショナル・チームとは限らない現象が起きている。

広瀬一郎氏の「サッカーと旅の楽しさ」とは、サッカー愛好家中一雄氏の「日本のサポーターも、サッカーそれ自体に酔いしれてしまう欧州や南米のサッカーに近づきつつある」とあるべきか。(山下悦子)

掘地に住んでいるのだが、フランス行きのゴールを決めた「野人阿野」が浦和レッズの選手といふこともあって、龍太氏によれば、国家原理に従属してきた近代サッカーは、今やナショナル・チームとは限らない現象が起きている。

「サッカー好きは旅行好きであり、サッカーの楽しさは旅の楽しさだ」とは、サッカー愛好家中一雄氏の「日本のサポーターも、サッカーそれ自体に酔いしれてしまう欧州や南米のサッカーに近づきつつある」とあるべきか。(山下悦子)

るとする「文藝春秋」の水谷さんの議論は大切で、日本の政治が融解し意思決定の中枢が動かなくなっているとする「フォーサイト」のタスカさんの分析もその通りです。高尾義一さんの「平成大不況の深層」(ボイス)は、ロングウェーブ仮説、趨勢成長率の屈折などの概念を用いて、深いところから歴史的状况を理論的に押さえています。「フォーサイト」の小暮さんは、日本人の苦手な情報戦について、日本経済の近代化の難しさを併せて論じています。「アエラ11」の「1万5000円割れて大不況」も、「財政再建を少し後にすらしても減税を実施」せよとするなど危機感がにじみ出ています。

橋爪さん 銀行家や政府当局者、企業のトップ、中堅幹部などは、経済現象の理解、もっと言えば経済学の理解が足りないように思える。自分で判断しリスクを背負って経済のかじ取りをしていく感覚が、特にバブルのころにうせていたのではないかと。片山修さんは「ヤオハン型倒産はまだ続く」(中央公論)で今の不況・倒産はカネ余りの状況の中で起こったなどと指摘しますが、預貯金が多すぎたこと、今起こっているクレジット・クランチ(貸し渋り)とは両立する。「現代」の論文が指摘するように、本来、銀行は「担保はなくても、企業の収益性や成長性を評価し、将来性がある企業へ融資して利益を得る」というのが基本的な役割です。ところが、日本の銀行は土地を抵当に貸しまくるバブルに巻き込まれてしまった。打つべき手は、倒れるべき金融機関は倒し、残すところは公的資金を投入してでも残すという厳しい取捨選択だと思ふ。「現代」の論文が言う「無能な銀行員」に平均以上の給与を払っている国際競争力のない無能な体質を削り、生き残る銀行も大幅な整理をしなければならぬ。そのうえで、起業家が生まれ、新しい産業分野を作るのに役立つ長期的施策を打ち出すべきです。

山下さん 熊谷勝行さんは、黒田稔郎さんとの対談「緩やかな回復」の嘘八百」(ボイス)で、経済実態の観点から「景気回復」といつつつけた政府のミスリードの責任は重し」と明確に指摘しています。政府は景気や産業活動の実感的な状態を理解せず現象と遊離している批判し「不良債権問題を一気に整理する」しかないとしていますが、今となってはすべて後手に回ってしまったという感じがします。

中西さん 大量の公的資金投入の決断なしで不良債権問題を解決しようとするのもムリです。ビッグバンにしろ早期是正措置にしろ、それなしでどうなるか、今の金融をめぐる政府の大きな決断は全部間違っている。しかもそのタイミングを設定したために危機が起こっているという構図がある。結局、ドラッグスティックな解決しかないが、そのリスクは政治のリーダーシップで受け止めるしかない。しかし、それができないのが真の危機なのです。

橋爪さん 不況というのは本来、物価や地価が下がり、金利も下がって新しいビジネスが起るチャンスでもあります。中沢孝夫さんのルポ「東大阪工場群は不況知らず」(中央公論)によると、東大阪市に集中している中小企業には企業努力の結果、すばらしい技術力と国際競争力を持つ、この不況下でも業績を拡大しようとするベンチャービジネスがあるようにですが、こうした例は少ない。低金利なのに設備投資が刺激されていないのが景気の上向かない原因で、その結果、資金が海外に逃げ出している。財政再建も大事ですが、そういう新しい産業を作る、こういう新しい部門に投資するといった前向きの長期計画も打ち出すべきです。

中西さん 日本の現状は、1980年、83年ごろの米国、77、78年ごろの英国に近い。このまま行くと結局、国民は一面大きな痛みを感じ、雇用不安も広がるでしょう。結局、共同体をどうのよう運営するかという日本人の姿勢の問題だと思ふ。経済だけでなく、司法制度、大学などの教育制度、社会治などあらゆるシステムの制度疲労がはつきりしてきている。共通するのは、本当の破局を経験しないと変えられないのか、一歩手前で回避して改革へ向かうのかという大きな分かれ道に

今あることです。価値観のレベルの变革が必要で、水谷さんのいうように取りあえず生活水準の低下を受け入れるしかない。「ボイス」で高尾さんが金融恐慌下の井上準之助の言葉を引いていますが、当時、危機が起ったのは経済界や政界のリーダーたちが「自分の社会的地位が落ちる」となると自己中心のミーイムに徹して、行っべき整理を先延ばしにしたせいだということです。日本社会は今、全く同じサイクルに入っている。こうした衰退の兆候に対しては、リストラダを含む厳しさによるのか、生命力の再生はないかと思ひます。

はしづめ・だいさぶろう 東京工業大学教授(社会学)

やました・えいこ 女性学研究者

なかにし・てるまさ 京都大学教授(国際政治学)

女性が発想、狙いも女性

「たまごっち」ブーム

- ◆「たまごっち」がわからない(池田晶子) —ボイス 死の意味を勘違いして育つ子供が増えるのがこわい
- ◆潮市民講座「たまごっち」(横山久司) —潮 対人関係を広げたい若者がみんな面白がっている
- ◆決定版! 「たまごっち」とは何か(野田香里) —現代 コミュニケーションを生み出したのがブームの秘密
- ◆「たまごっち」フィーバーを分析する(葦原真幸) —中央公論3月号 若者のデジタルで無機質な交流を好む傾向が背景に
- ◆特集 平成新三種の神器大研究(岸田秀、養老孟司、山室恭子、橋爪大三郎ほか) —広告批評3月号 アプリクラ、「じゃま丸」との間に共通の感性を探る

がう一年近くかけて開発した。ゲームを小さくしただけの「テトリスジュニア」とハード面はほとんど変わらないのですが、アクセサリや時計としての要素も持たせた「電子ペット」として女の子の心をつかんだ。確かに性別役割分業をなぞっているように見えるけれど、それ以前に女性に特化したゲームに興味を示す点が面白いと思います。ポケベルや携帯電話など、女性たちは電子テクノロジーを思いを込めて使っています。この点が興味深い。一過性の流行でしょうが、だれの予想も裏切ることまで大化けしてしまっ

た。このにも興味を持ちます。中西さん 新幹線で中年の女性グループが「あなたの子供を育てたことがないから分らないよ」なんて言い合っている。「たまごっち」に夢中になっているのを見かけました。お堅いイギリスの「タイムズ」の社説が「たまごっち」のイギリス上陸をいかにユーモラスに取り上げていました。葦原真幸さんの「たまごっちフィーバー」を分析する(中央公論3月号)は現代の若者は無機質な交流を好む傾向にあるので

はないか、と指摘しています。おもちの話を聞くたびに立てたこととはないのは確かですが、流行のサイクルが非常に短くなってきたという点が気になります。山下さん 「たまごっち」のアイデアを生み出したのは女性ですが、いかに女性の発想という感じはします。「フリクラ」も女性だったそうで、今ヒット商品を生むエネルギーは女性の方が持っているようです。流行の担い手になるのも女子中高生です。今の女子中高生は可処分所得も多い。商品を開発する側も彼女たちに焦点を合わせています。

橋爪さん 目標があつて無償の献身的な努力をして充実感を味わう。しかも対象と情緒的な関係を結び結ぶことが好む。おもちやではあるけれど、テクノロジーを受け入れる際のあせみをみながら「たまごっち」に感じているのかもしれない。山下さん 私の娘の周囲などを見てみると、いまの女の子たちはシブシブな会話はしない。「たまごっち」や「フリクラ」を媒介として、楽しくその場を過ごすようになった感じがあります。

中西さん 私も学生たちに接していて感じますが、彼らは何か一つの方向のある話を選んで、軽く、ネア力に言葉をやりととりしている。流行のサイクルが極端に短くなっているのは、このあたりと関係があるように思う。おおげさにいつか文明の姿容といえるかもしれない。情緒的な触れ合いを大事にコミュニケーションをしている。でも中身はない。そういうコミュニケーションには「たまごっち」のような存在物がいつも必要になる。その存在物が新しい文化を作っている。こういう構造として理解できるように思っています。

橋爪さん 「文藝春秋」の「日本経済の大きな不安の特集」で田尻嗣夫さんが「所得格差が広がる。中流」がいなくなると言っています。「できる人」と「できない人」の格差がはつきりしてきているのですが、消費文化は付いていけない人に合わせるから、どんどんレベルが下がってゆくの。「たまごっち」や「フリクラ」の流行はどうかでいう状況はつながっているように思っています。

橋爪さん 「複製人間にも独自の『人権』がある(サビオ)の宮崎哲弥さんは、一卵性双生児もクローンだといって、そんなに騒がなくていいとしています。しかし、体細胞から新しい生命が生まれるのなら、単性生殖が可能なので、これは「人間」の概念が変わるほどインパクトのあることではないか。男女の愛結、家族、親子関係などはどうなるんだろうと考えると衝撃を受けます。

中西さん 各国の反応が興味深かったですね。クリントン大統領が「クローン人間」についてなっている研究は国として許さないとはいった。西洋文明の超大国として世界の秩序を握っている人間にとっても大きな問題だと感じました。英国やドイツも敏感だった。とくに日本は、そんな印象を受け

きちんとした監視が必要

クローン羊

- ◆複製人間にも独自の「人権」がある(宮崎哲弥) —サビオ4/23 自分の体細胞から生まれたクローンも所詮は「他人」
- ◆「バイオエシックス」——日本は論議も政策も10年遅れた(米本昌平) —サビオ4/23 日本も生物技術に関する研究機関を国レベルで作れ
- ◆あなたも食べている? 「遺伝子組み換え食品」の不気味(天笠啓祐) —サビオ4/23 安全性は未確認。「表示なし」では人体実験と同じ
- ◆クローン羊は「神の領域」を侵したか(上田俊英) —中央公論 「ドリー」は60億市場を生み出す、との見込みも
- ◆特集 クローン人間が生まれる? —ニューズウィーク3/12 「科学の前には、倫理的な懸念も太刀打ちできない」

ない。この技術は老化防止や肥満の解消、エイズやアトピーの治療などに役立つ可能性があると期待される。でも、山下さんが言われたような、倫理的に言われたような危険も感じないかという危険も感じている。クローン技術が将来、どんな障害をもたらすのか。もっと全体像のわかる報道があつてもよかったです。

橋爪さん ローマ法王はクローン技術の研究に反対しています。それは神にそむく行為だからです。でも、イエス・キリストは神のクローンじゃないですか。神の意志だったらいわけて、クローン技術自体はすばらしい。同じ遺伝子の実験動物を多数つくることできるし、品種改良も推進できる。人間に使うのが許されなければ、制度的、法律的にどう禁止していくかを徹底的に議論すべきなのであって、動物実験や改良の有用性が明らかなら、研究を進めてもいいんじゃないかな。未熟らしいという点では、マングローブの遺伝子を他の植物に入れて強い植物をつくり、それで砂漠を緑化しようという話が出て

います(が、幹部征夫一もろででない)。この技術は老化防止や肥満の解消、エイズやアトピーの治療などに役立つ可能性があると期待される。でも、山下さんが言われたような、倫理的に言われたような危険も感じないかという危険も感じている。クローン技術が将来、どんな障害をもたらすのか。もっと全体像のわかる報道があつてもよかったです。

中西さん 複製人間にも独自の「人権」がある(サビオ)の宮崎哲弥さんは、一卵性双生児もクローンだといって、そんなに騒がなくていいとしています。しかし、体細胞から新しい生命が生まれるのなら、単性生殖が可能なので、これは「人間」の概念が変わるほどインパクトのあることではないか。男女の愛結、家族、親子関係などはどうなるんだろうと考えると衝撃を受けます。

中西さん 各国の反応が興味深かったですね。クリントン大統領が「クローン人間」についてなっている研究は国として許さないとはいった。西洋文明の超大国として世界の秩序を握っている人間にとっても大きな問題だと感じました。英国やドイツも敏感だった。とくに日本は、そんな印象を受け

橋爪さん 「複製人間にも独自の『人権』がある(サビオ)の宮崎哲弥さんは、一卵性双生児もクローンだといって、そんなに騒がなくていいとしています。しかし、体細胞から新しい生命が生まれるのなら、単性生殖が可能なので、これは「人間」の概念が変わるほどインパクトのあることではないか。男女の愛結、家族、親子関係などはどうなるんだろうと考えると衝撃を受けます。

中西さん 複製人間にも独自の「人権」がある(サビオ)の宮崎哲弥さんは、一卵性双生児もクローンだといって、そんなに騒がなくていいとしています。しかし、体細胞から新しい生命が生まれるのなら、単性生殖が可能なので、これは「人間」の概念が変わるほどインパクトのあることではないか。男女の愛結、家族、親子関係などはどうなるんだろうと考えると衝撃を受けます。

橋爪さん 「複製人間にも独自の『人権』がある(サビオ)の宮崎哲弥さんは、一卵性双生児もクローンだといって、そんなに騒がなくていいとしています。しかし、体細胞から新しい生命が生まれるのなら、単性生殖が可能なので、これは「人間」の概念が変わるほどインパクトのあることではないか。男女の愛結、家族、親子関係などはどうなるんだろうと考えると衝撃を受けます。

予防・治療に求められる

「自己責任」

がんと生きる

- ◆ガン病棟日録(江國滋) —新潮45 11月号
8月に亡くなった筆者の壮絶な闘病記。連載第2回
- ◆対談 ガンからの復活(梅原猛、瀬戸内寂聴) —中央公論
2度目のガン体験で、人生の冬を痛感した(梅原)
- ◆対談 「がんの時代」を生きる(五木寛之、竹中文良) —潮
がんを考えることは、社会の問題に通じる(五木)
- ◆「近藤誠理論」を検証する(深見輝明) —潮
「がんと闘うな」をめぐる論争の整理、検証を試みる
- ◆延命できればいいではないですか —サンデー毎日11/23
抗がん剤の延命効果のデータ評価をめぐる議論に

山下さん 母も義姉もがんで亡くなったので、切実なテーマです。告知するかどうか、どのようにつなぐのか、医者との付き合い方など、さまざまな問題があると思えます。もっとも印象的な文章は連載中の江國滋氏の「ガン病棟日録」(新潮45)でした。俳句を交えたリアルな闘病記で、がんというのは甘んじない病気なんだと改めて実感させられました。がんは検査や治療が患者にとってとても厳しくつらい病気ですね。では、どう治療を選ぶのか、これは自身の死生観に照らして合わせて、自分で選ぶしかない。梅原猛氏と瀬戸内寂聴氏の対談「ガンからの復活」(中央公論)も五木寛之氏と竹中文良氏の対談「「がんの時代」を生きる」などを収録した「潮」の特別企画「がんとの対話」も読みごたえがありました。がんは痛みがひどくて、身内が見ていられないほど苦しみますが、五木氏が「痛み」を癒やすことが、末期だけなら、医療のいちばんの目的」と主張しているのにも共感してました。

橋爪さん がんの語りが変わってきたのを感じます。しばらく前までは、がんという不治の病で、かかるのはラジカメのようなものだと思われていた。でも最近では発生のメカニズムがかなり分かってきて、抗がん剤や放射線治療、切除手術などで、中期ならなんとか克服できるケースが増えてきた。橋本光弘氏の「がん予防のための日常生活の工夫」(潮)は、がんもストレスや食習慣、喫煙などが引き起す「生活習慣病」的なところがあり、その人のライフスタイルとがんの発生がかなり結びついていることを論じています。がんはラジカメという不治の病で、かかるのはラジカメのようなものだと思われていた。でも最近では発生のメカニズムがかなり分かってきて、抗がん剤や放射線治療、切除手術などで、中期ならなんとか克服できるケースが増えてきた。橋本光弘氏の「がん予防のための日常生活の工夫」(潮)は、がんもストレスや食習慣、喫煙などが引き起す「生活習慣病」的なところがあり、その人のライフスタイルとがんの発生がかなり結びついていることを論じています。

ろつ、社会的義務は果たしたから、これからは本当に書きたいものだけ書こう」と思うようになったおっしゃっている。自分は、何をしなければいけないかを考えさせる力が、この病気にはあるんです。それと今の日本で健康ブームが異常に大きい。これはどこから来るかというと、今世紀初頭のイギリスでもそうなんですが、繁栄した社会が少し衰退し始めるのと異常な健康ブームが起るのですね。当時のイギリスの新聞を見ると、薬の広告でいっぱいなんです。温泉ブームも古代ローマと共通して、これは文明史の観点から考えても興味深い。時代の行き詰まり、という感覚がまた生じてくると、個人レベルの本音の関心が露出する現象として普遍性がある。各雑誌を見ても全体として、がんについて非常に細かい各論がいろいろある。ところが、デジタルに目を向けると、いかにがんを克服する可能性など、遠い未来を見すえた前向きな総合的な論考が見られなかったですね。

橋爪さん 近藤誠氏の主張をめぐって「サンデー毎日」と「週刊文春」とがやり合っていますが、現代のがん治療がかなりの部分で無駄だというのが近藤さんの持論です。早期発見も無駄、手術も無駄、抗がん剤は効かない。この思い切った主張を「潮」で深見輝明氏が検証していますが、近藤氏が火を付けて下さったのは、患者が自分の責任で治療法を選ばなければならぬという状況が見えてきた。山下さん 近藤氏の発言には妥当な部分も含まれている部分があるように思いますが、不幸にしてがんになった場合には「治療」を信じて前向きに治療を受ける姿勢を患者が持たないようでは、やりきれません。現在の健康ブームですが、病気になるのを防ぐという意識が、健康ブームの裏面に潜んでいるように思えます。そういうことも考えると、健康ブームの背景には深刻な事情もあるように思えます。私には、ここに大変な虚無を感じています。

リーダー誕生のドラマ

W杯出場決定

- ◆強くもなく弱くもない日本サッカー(石川好) —正論
根拠不確定なサッカー界は日本の急製造近代に似て
- ◆韓国の留学生が見たW杯韓日決戦(権容爽) —論座
出場決定は「大和魂」でなく中田のクールな判断力
- ◆「サッカー日本代表が我が人生」の人々 —スパ12/17
会社を辞めた、転職した……サポーターたちの肖像
- ◆二十歳のリーダー「中田英寿」誕生の夜(金子達仁) —文藝春秋
「カズ交代」に象徴されたイラン戦のドラマを再現
- ◆人物交差点・岡田武史 —中央公論
「最も気の毒な部下」と呼ばれた監督の人心掌握術

山下さん サッカーの日本代表が史上初めてワールドカップに出場することが決まりました。論文では、金子達仁氏の「二十歳のリーダー」中田英寿誕生の夜(文藝春秋)や「カズと中田 主役交代の時」(アエラ12/1)のように、三浦知良選手から中田選手へと代表チームの中心が移ったことを論じたものに目をつかれました。特に、中田選手の独特なキャラクター。マスコミから生息気だと言われることもあるようですが、従来の体育会系のイメージとは随分違った選手です。国家のために戦うのではなく、自分のために戦うのだと言ってはならない。そういう世界性でも呼べる傾向は、野球の野茂英雄投手とも通じるのではないのでしょうか。中田選手はイタリヤでのプレーを希望しているようですが、もう一つ印象的だったのは「岡田監督 孤狼な戦争」(週刊文春12/1)に代表される岡田監督論ですね。イランとの第3代表決定戦で、もうだれが見ても、早く選手交代しろ」と思っている。私には、ここに大変な虚無を感じています。

大物選手を降ろして、城選手と呂比須選手を入れた。この選手起用が高く評価されています。マスコミは、権威とか昔の実績に頼らない選手起用に、政治なども含めて、日本の現在の暗い雰囲気吹き飛ばす道を求めているように感じます。もう一つ、目を転じると、バスケットボールが男女とも、世界選手権に出場することが決まりました。また、女子サッカーも世界選手権に出場します。若い世代の男女がいろいろなスポーツで世界を舞台に活躍できる水準まできているという点も、このように、サッカーのフィーバーを相対化する意味で、これらにも注目してほしいですね。

橋爪さん 読んで一番奇妙に思ったのは「サッカー日本代表が我が人生」の人々(スパ12/17)です。いい大人が大枚はたいて外国まで応援に行ったり、会場の周辺にテントを張って、何日も前から試合を待つ。中には会社を辞める人もいます。そして全身全霊を上げて応援する。動機を聞くと、感動するとか、サポーターの頑張りで試合を左右できるとか言うわけです。私は、ここに大変な虚無を感じています。

石川好氏の「強くもなく弱くもない日本サッカー」(正論)は石川氏らしい謙遜論がきいた論文です。日本チームはどこに核があるのか、果たして強いのか弱いのかわからない。これは、日本という国そのものの姿でもあるのではないかと指摘しています。応援しては、私は30年前に見た英国のサポーターたちの興奮した姿を思い出します。力に期待したいですね。

中年紳士がいったんサッカー場に入ると叫び、足を踏み鳴らし、最後には感動の涙を流す。こういうスポーツがあるんだと驚いた記憶があります。当時の不況の中で、サポーターがどんどんフリーガンに化していった。人々は興奮したいからサッカーを見に行くので、それにすべて身をゆだねてしまっただけです。W杯から戦争にまで発展した例も過去にあるくらいで、これはちょっと我々、冷静さも持った方がいい。山下さん サッカーは、見て楽しいスポーツですね。臨場感や一体感など、ロックのライブのような感覚があるのも確かです。中西さん ヨーロッパでは街が火の海になったり、民家が略奪されたりしている。橋爪さん 2002年のW杯日韓共同開催を控えて、このあたりの問題も考えていきたいですね。中西さん でも、高層サポーターなんていうものなし、上からの管理というのはこれからの日本を考えるとどうかわからない。サポーターの中から自発的に声を組織化する動きが出てほしいと思います。若い層の自己決定能力、自己管理能力に期待したいですね。